千葉・西原（さいばら）遺跡

1　所在地　千葉県袖ケ浦市永地

2　調査期間　確認調査　一九九六年（平8）九月～一一月
　　本調査　一九九七年一一月～一九九八年一月

3　発掘機関　(財)君津郡市文化財センター

4　調査担当者　桐村久美子

5　遺跡の種類　集落跡・散布地

6　遺跡の年代　弥生時代中期、古墳時代前・後期、九世紀～一〇世紀

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

（姉　崎）

西原遺跡の所在する袖ケ浦市永地は、市のほぼ中央部に位置し、袖ヶ浦台地の南端の舌状台地と、小櫃川の沖積作用によって形成された平野との間の微高地に住宅地が広がる地域である。舌状台地上には上泉遺跡群があり、その一部は文脇遺跡として発掘調査が行なわれ、弥生時代後期から、奈良・平安時代までの集落が展開していたことが明らかにされている。さらに台地を東方に進むと、奈良・平安時代の工房・集落遺跡として知られる永吉台遺跡群が所在する。また、南西の小櫃川河畔に位置する木更津市上望陀・下望陀は、古代の望陀郡衙推定地とされている。

西原遺跡は、永地地区のほぼ全域にあたる。地区の中央部を流れる松川の西側と東側とでは、やや様相が異なり、西側は、現在住宅地となっている微高地（舌状台地の西限）を中心に、弥生時代中期から古墳時代の集落が展開し、住宅地の南から西の低地に平安時代から中近世の遺物が散布している。東側は、調査範囲が水田地帯のみに限られていたこともあり、遺構はほとんど検出できなかったが、台地寄りの低地の一部に、奈良・平安時代と古墳時代の遺物包含層が広がっていることが確認できた。

奈良・平安時代の遺物包含層は、約四〇㎝の厚さで堆積した暗灰褐色の粘質土層で、木簡は確認調査時にこの層中から一点出土した。共伴遺物は、九世紀中頃から一〇世紀にかけての土師器の杯が多く、墨書土器も含まれている。墨書土器は、「生」と書かれたものが四点、「生」と思われるものが三点、不明のものが二点である（本調査分は現在整理作業中であるため、いずれも確認調査の成果のみ）。本調査では、この奈良・平安時代の遺物包含層を掘り抜く形で井戸を検出した。井戸からは平安時代末期の杯が出土しているため、遺物包

含層及び木簡の年代について、少なくとも中世までは下らないものと確定できる。

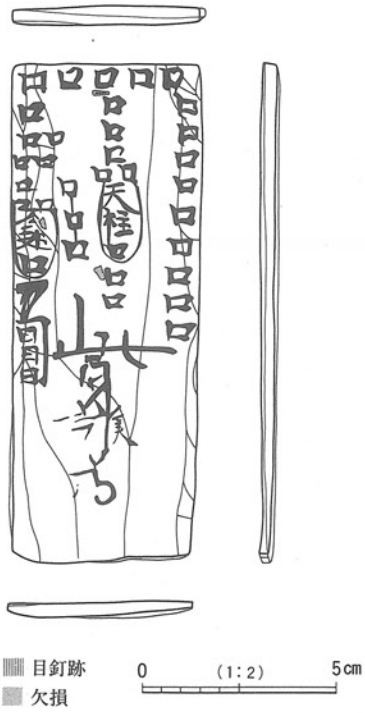
木簡出土のトレンチでは、平安時代の遺物を包含する粘質土層の直下に筵を敷いたような植物質の層があり、この層上からも平安時代の遺物が集中して出土している。ちなみにこの層の下は、古墳時代の遺物を包含するマコモの泥炭層となる。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「(符籙) 此身護為」　135×50×5　011

完形の呪符木簡である。表面全体に朱色の文字が書かれており、顔料はベンガラと思われる。計三三字の「口」と三字の「日」を縦横に配置し、中央付近に「天柱」その向かって左に「身」のような文字が見られ、下半部中央の文字は「此身護為」と読める。上部中央に目釘の跡が残ることから、建物の入口などに打ち付けて使用したものと考えられる。

9 関係文献

(財)君津郡市文化財センター『西原遺跡』(一九九七年)

(桐村久美子〈元(財)君津郡市文化財センター、現袖ケ浦市立郷土博物館〉)